

wave

美術館だより
vol.35
AUG 9 2024



遠藤彰子《たそがれの街》1982年 新潟市美術館蔵

特集

開館40周年へ カウントダウンスタート

インタビュー

画家 遠藤彰子さん

開館40周年へ カウントダウンスタート

新潟市美術館は1985年10月13日に開館し、2025年で開館40周年を迎えます。節目の年に向けて動き出したプロジェクトについて、現場からお伝えします。

その1 データベース

所蔵品データという「壁」



当館は、これまで2冊の所蔵品目録をまとめています。最初は2006年2月、『新潟市美術館全所蔵作品図録 絵画篇』が刊行されました。故・林紀一郎顧問(初代館長)は、その巻頭で

「今こそ、美術館の“顔”は、点から線へとコレクションのベクトルが志向し、ようやく輪郭線を描きはじめたのだ、と言えるだろう。点が線に、そして面となり完全な“顔”が描かれるには、“百年の大計”を必要とする」と、大きなビジョンを語っています。この目録は、一般的には作家名の50音順・ABC順に作品を配列するところ、作家生年順という異例の構成です。当館コレクションを通じて美術史の流れを概観できる(したい)というような、これも“百年の大計”の表現だったのかもしれない。

筆者(2012年9月に中途採用)に課されたのは、その大きなビジョンを仔細にわたって点検するような作業でした。2冊目となる『新潟市美術館所蔵品目録』(2016年3月)の編集を命じられたのです。このとき館内では、すでに所蔵品データは完備しているのだから、それを入稿用に多少整えれば良い、と考えられていたよ



のネット公開

うです。ところが、早い時点で、タイトルに「全作品」や「総目録」と謳うわけにはいかないことが分かりました。さらには、刊行自体も日延べされました。当時は「新潟市美術館の評価及び改革に関する委員会」（2010年度）から数年を経たばかり、二度目の目録編集も、当館再生の一環であると認識を新たにせざるを得なかったのです。

既存のデータベース(クラリス「ファイルメーカー」を使用)は、文字原稿の出力元となるべきものでした。しかし2010年度中に急ピッチで入力されたものとのことで、紙製の作品カードとデータベースとの突合作業が二人がかりで幾日も続きました。作品の寸法、素材・技法、署名・年記などを確かめるため、収蔵庫内での現物確認も繰り返しました。展覧会出品歴をつきとめるべく、様々な文献に当たった挙句、当の作品裏面に出品シールを見つけた時の嬉しさと悔しさ(笑)。一方、各項目の表記の統一にも努めました。また、それまでの作品IDが、たとえば「絵1」となっていたものを、「T0001」と5つの1バイト文字に改善しています。とくに慎重な協議を要したのは、分野の見直しでした。「絵画」と一括されていた作品群を、「日本画・油彩画・その他」と「水彩・素描」に大きく分割することにしました。

開館40周年を機に導入を予定する新たなデータベースは、当館にとって次の一歩です。館の歴史の継承は、検証・批判・修正の連続に他ならず、無謬性を前提としたり、一職員の手柄として吹聴できるようなものではありません。これからも続く私たちの仕事は、大きな壁のレンガや目地の一々に、じっと目を凝らすような営みでもあり続けるでしょう。

(学芸員 藤井素彦)

「驚異の部屋」はいまどこに

新・博物館法が昨年より施行されました。新しい登録制度や学芸員資格のこと、改正に至るまでさまざま議論がありました。デジタルアーカイブもその焦点の一つです。

改正博物館法第三条で博物館の事業として「博物館資料に係る電磁的記録を作成し、公開すること」が謳われています。すなわち資料(とそれに関する情報)をデジタル化して保存、インターネットを介して公開しましょう、ということです。昨今の技術の進歩を考えれば、居ながらにして全世界の所蔵品を高精細画像でいつでも誰でも検索可能!という日もそう遠くはないでしょう(当館の場合すぐにはそうなりませんのであしからず)。この夢は大航海時代に地球上のありとあらゆる動植物を求めて始まった、あの「ヴンダーカムマ驚異の部屋」以来、人類の壮大な野望だったといってもいいのです。世界のすべてを集め尽くし、分類・展示する博物学の、当然の帰結といえるでしょう。

それでも、ある日美術館で、ふと一枚の絵に魅せられその前を動けなくなる—そんなあなたの身体と心を通してしか起こらない、神秘的体験は、きっとこういう時代だからこそ、もっともっとかけがえないことになるはずです。全世界と繋がる網目の隙間に、その場所は「人間のために」絶対を守っていかねばなりません。

(学芸員 荒井 直美)

その2 美術館の「アンチエイジング」

間もなく40歳を迎える新潟市美術館。施設の老朽化が進み、2024年10月から2025年夏ごろにかけて4度目の大規模改修工事に伴う休館を予定しています。こういったところが変わるのでしょうか。

01 美術館の生命線 空調設備を一新

作品を保存・展示する環境では、最適な温湿度を一定に保つことが重要です。その調整を行う空調設備は、美術館の生命線とも言えるでしょう。10年毎のメンテナンスを繰り返しながら、長年にわたり働き続けた空調機ですが、老朽化のために、竣工以来最も大規模な更新作業を予定しています。なかなか外から変化が見えにくい部分ではあるものの、作品を守り伝えていくために大切な工事なのです。



約40年間、働き続けた功労者です!

02 前川建築“印” 外壁タイルのメンテナンス

新潟市美術館を設計した建築家・前川國男のトレードマークともいえる「打ち込みタイル工法」。当館の外壁には、全国に広がる前川建築の中でも特徴的なオリーブグリーン系のタイルが使用されています。今回の工事では経年劣化対策として、張替や

補修作業を行います。併せて、打放しコンクリート壁のメンテナンスや防水工事も予定しています。



カラフルなマスキングテープが楽し気ですが、改修に向けた事前調査の様子です。タイルの浮きやひび割れなど症状の度合を色ごとにランク付けて示しています。

03 光が変わると見え方も変わる 企画展示室の照明をLED化

前回(2014~15年)の改修工事では常設展示室の照明をLED化しましたが、今回は企画展示室の照明を一新します。照度(明るさ)だけでなく、色温度(色味)も調整できる照明設備を取り入れ、より見やすく、美しく、作品をご覧いただけるようになります。

改修工事で振り返る 新潟市美の40年

新潟市美術館は、開館以来これまで10年毎に都合3回、大規模な改修工事を行っています。

開館



1985年10月13日 新潟市美術館が開館

旧新潟刑務所の跡地に、隣接する西大畑公園とともに前川國男の設計により整備されました。海岸からおおよそ350mと海に近いので、設計にあたっては塩害対策が重要視されました。

開館
10年



▲「山の庭」の高く繁るブナ林も、植栽当時は細々としていました。

1992～1994年 現在の常設展示室と搬入口、 2階収蔵庫を増築

開館時は500点に満たなかった所蔵品が10年後にはおよそ3倍近くに増えたこともあり、展示・収蔵機能のさらなる拡充を図りました。

開館
20年



▲「スコットランド国立美術館展」(2005年)の会場写真。展示造作も華やかに行われました。

2004～2005年 照明と空調設備の更新

開館20年を前に、更新時期を迎えた空調設備等の改修を実施。2005年には貸出条件の厳しい海外美術館のコレクション展が2回も開催されました。

開館
30年



▲「本のラウンジ」には「前川好み」の家具たちと天童木工の優品が集まりました。

2014～2015年 老朽化対策と施設の大規模改修

エントランス部分や講堂の模様替え、「ラウンジN」や「本のラウンジ」の開設、服部一成さんのデザインによるサインシステムの導入など、オリジナルの部分を活かしつつも、新たな新潟市美術館として全面リニューアルしました。

開館
40年

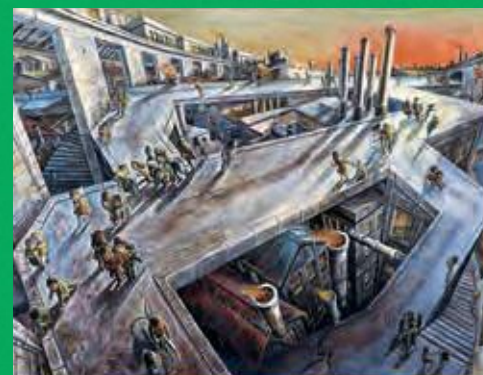
2024～2025年 乞うご期待！

表紙 | 作品と作家⑳

《たそがれの街》1982年
遠藤彰子 えんどうあきこ(1947～)
油彩・カンバス 194.0×259.0cm

1947年、東京都中野区に生まれた遠藤彰子は、1969年に武蔵野美術短期大学を卒業後、結婚を機に神奈川県相模原市へ引っ越し、住居兼アトリエを構えます。当時、付近の林に入ると、野兔や狸がいるような豊かな自然が残る土地でした。東京で育った遠藤は、自然に囲まれた環境に身を置く喜びを創作の源泉として、動物たちと人間と一緒にカーニバルをひらく「楽園」と題したシリーズを発表します。しかし、1976年以降、身の回りや社会情勢の変化によって、テーマは「楽園」を離れ、現実社会に目を向けた「街」へと変容していきました。描かれた街は、歪んだ道や複数の視点から構成され、これまでの自身の内面とともに、複雑化した社会を抽象的に表現しています。

本作はタイトルの「たそがれの街」からも示されているように、「街シリーズ」の作品のひとつです。道は8の字を描くように曲がり、だまし絵のような高低差を錯視させます。ここに描かれているのは、子供の頃の思い出をつなぎ合わせたような空想の街で、何処か実在する風景ではありません。夕暮れ時の帰路につく人々は、子どもも大人ともとれ、夕日から追われるよ



うに歩いています。遠藤によれば、人々から伸びる影からは、今日の終わりと明日への希望が感じられると振り返っています。

後に発表する500号サイズ(約2.4×3.3m)の大作を契機に画面はより巨大になり、テーマは街から徐々に離れていきます。今日まで取り組んでいる大作群では、幻想的な世界観と生物の根源的なテーマが広がっています。それは、本作を含むこれまでの作品で取り組んできた現代社会を見つめる視点が活かされているのです。

※「遠藤彰子展 巨大画の迷宮にさまよう」にて特別出品中 (学芸員 塚野 卓郎)

新たな学芸員が仲間入り

はじめまして。4月より新潟市美術館に配属された塚野卓郎です。生まれてから18年間を過ごした新潟市で学芸員として働けることを嬉しく思います。新潟を離れていた間も、新潟市美術館へは帰省の度に展覧会を訪れ、大学時代には博物館実習を受けに自転車で家から通っていたこともあり、自分としては身近な美術館です。

これから新潟市美術館は改修工事による長期休館となりますので、皆さんとかかわれる機会はまだまだ少ないかもしれませんが、来年以降新しくなった新潟市美術館とともに、よりよい美術館を目指すお手伝いができればと思います。どうぞよろしくお願いたします。 (学芸員 塚野 卓郎)



新潟に戻ってきてから始めたプランター菜園。さっそくミニトマト1号がすくすく育っています。

編集後記

美術館の開館から2年後の1987年に創刊して以来、おおよそ年1回のペースで発行してきた美術館だより「Wave」も今回で35号目となりました。取り上げるトピックも、デザインも、判型も、その時代ごとに変わりながら、美術館の今をお伝えしてきました。新しい「波」を起こすような場所を目指して、美術館も、「Wave」も準備期間をいただきます。休館中の様子は随時ウェブサイトなどで発信していきたいと思っておりますので、ぜひご覧ください。 (学芸員 菅沼 楓)

遠藤 彰子



遠藤彰子は、1947年東京都中野区生まれ。神奈川県相模原市にアトリエを構え、今も変わらず精力的に絵を描き続けている。当館では、新潟県で初の個展となる「遠藤彰子展 巨大画の迷宮にさまよう」(2024年6月22日～8月25日)を開催中。展示作業の全日程に遠藤先生が立ち会い、作品の配置から照明まで細かなアドバイスを受けながら出来上がった展覧会である。展示作業も一段落し、展覧会初日の開幕記念講演会を明日に控える6月21日にお話をうかがった。

聞き手：児矢野あゆみ、塚野卓郎(新潟市美術館学芸員)

描いて、描いて、描きまくる

遠藤彰子の世界

——絵を描くようになったきっかけなど教えてくださいませんか？

母が言うには、赤ちゃんの時からとにかく紙とか描くもんがあると、うんうん言いながら、言葉を喋る前から描いてたっていうことをよく言っていました。私の記憶にあるのは、幼稚園やら小学生の時に、普通の土からだんだんコンクリートになっていくなかで、ローセキっていうのがあったんですね。チョークとはちよつと違うんですけど、幼稚園から帰ると、(道路に)自分を描いたり、友達描いたり怪しく描いたり。だんだんだんだんやってくるうちに、物語みたいな感じで、お父さんが犬に追いかけられたり、犬が変わっていったりして、なんて面白いんだろうって思ってた。やっていくうちに、一つの物語になるっていうか。雨が降ったり、いろんなことがあると(絵が)崩れますよね、するとまたそこから描き出したりして、いろいろ動いていく形っていうのは、子ども心に面白かったんでしょうね。

——好きな画家などはいらっしやいますか？

もう数限りなくいるんですけど、若い頃にはボッシュ(注1)とかブリュッセル(注2)とか。不可思議でありながら、細かくも描いてありながら、全体が面白くまとまっているっていう点で。やっぱりあのあたり(の画家)は、私が若い時に考えた感覚がずっと続いているでしょう。

——そういった画家たちのことは、どこで知ったんでしょう。

本ですね。もともと高校が絵の学校行ってましたんで、駒場高校っていうのがあって(東京都立駒場高等学校芸術科卒)。そこには本がいっぱいあってよく読んでましたね。私的なことなんですけど、父が高校二年の時に倒産しちゃったのね。大きな家からほんのちっちゃい、もう三畳、六畳ぐらいしかないようなところに引っ越して。自分で

月謝を払って高校と短大(武蔵野美術短期大学)を出たんです。

——ええ、そんなご苦労があったのですか。アルバイトとかしながら…？

うん、パン屋に行ったり、ラーメン屋に行ったり。でもいつも本を見てましたね。いやあ、これはすごいなって。家のこと考えるとちよつと暗くなっちゃうので、いつも図書館に行ってるっていう風な絵描いてみたいとか、いろいろ思いながらね。

——現在は、美術団体の二紀会や、母校である武蔵野美術大学の理事などなさっていますね。絵画制作との両立が難しいのではないのでしょうか。お忙しいことと思います。

大変なんだけど、これをなくしちゃったら私自身の生きていく意味がないから、そこをなんとかね、やりくりしてるっていう感じ。毎日あと2時間は描け

注1. ヒエロニムス・ボッシュ(1450頃-1516)ネーデルラントの画家。細密な描写を用いて、異形の生き物が画面を埋めつくし、空想上の建物が立つ、奇想天外な作品を制作したことで知られる。代表作は《快樂の園》など。

る！とかね。でも楽しいからね。苦しいのも同じにあるんだけど、今描きたい絵の完成を見たいというのがすごくあるわけ。これは完成じゃない、これはダメだ、っていう感じで。ほとんど詰めていく中にちょっと、新しい、今までに描いたことないぞこれは！とかね。こういう考え方は今までしなかったなとか…。

これはうまくいかんぞ、みたいなのはよくありますね。だけど、それも絵で解決していく以外ないんで、また描いて描いて描きまくっていくなかに、ちょっと明かりが見えたかなみたいな。失敗は成功のもとなんて、つまらないこと言いますけど、でも本当にそうだと思う。失敗ってわかれば、それは非常にありがたいことと。あとこれ直しやいいんだっていう感じで、一か月ぐらい勉強しますよ。でもね、なんかそこでパーってやれると、は一、絵を描いててよかったとかね。やっぱり絵の醍醐味はそこにあるような気がする。

——絵が完成したと思うのはどんな瞬間なのでしょう。

方が下に沈んでいくものと、上に上がっていくもの…、こういう感じにした。人がね、走ってるようなイメージが頭の中に浮かんで、ドロイングも何回も何回もしてるうちにこういうのが出てきたっていう絵でね。結構マチエールみたいのをつけたような記憶があります。さらさら描いてんじやなくて、なんかこのへん、わりかしがつちりつけてて(道路のあたりを示す)。二紀会にこれを最初に出した時に、「遠藤さんちょっと変わったね。いいよ。」なんていう先生もいてね。その頃まだ30代で、そういう記憶あります。私、この絵が好きだったんですよ。

——じゃあ、美術館から声がかかった時には…(1986年新潟市美術館購入)

そう、嬉しかった。まだ何者でもない私の絵をね、購入してくださったっていうのはね。この調子でやってもいいんだっていう後押しされたようでよく覚えてます。(新潟市美術館の)壁

不思議なんだけど、だんだんだんだん煮詰めていく中になんかこう、ぴゅんと寂しくなるようなところがあるんですよね。完成の最後の方ですね。生きてることが寂しいってわけじゃないし、この絵が終わるから寂しいってわけでもないし、なんかわかんないけど虚しいっていう変な感覚があって、これはこれで終わりかなっていうそんな感じしますよね。どんだんだん詰めていかないとそれは出てこないんですけど。なんとも言葉に表現できない。こうやって見ると(翌日の開幕記念講演会のためのスライドショーを見て)、その頃の自分がわかりますよね。あ、この頃こんなこと考えてたんだ。絵を見てね、なんか涙が出ちゃうようなところありますよ。

——ちなみに、新潟市美術館が所蔵している《たそがれの街》を(覧になって、思い出すことはありませんか？(図1、表紙作品))

に飾ってあるからっていう話を聞いてひとりで見に来たの。こんなところで個展ができたらいいなと本当に思ったの。40年でこういうかたちになって本当に感慨深いですよ。どこに置いてあったかって全然覚えてないんですよ。壁があって、そこに200号の絵があって、しみじみとそう思ったもん。人生わかんないね。(笑)

——当館としても、開館当初に収蔵された作品がきっかけで、このような個展の開催に繋がったのは本当に嬉しいです。いろいろとお話をお聞きしましたが、何か新潟での思い出があれば教えてください。

私は高校のときに芸術科にいたんですけど、主人は普通科の部長をやったの。そのときに合同で、新潟にある山に夏休みにスケッチ旅行に行こうってなって。その山に行って、帰ってきてー私は石の上で絵を描いていたのをよく覚えてるんですけどー、懇親会っ

あれはね、まだまだこれからっていう時の絵で。安井賞を取る前の絵ですよ。(『遠い日』(1985年、東京国立近代美術館蔵)で第29回安井賞展安井賞を受賞)



図1. 遠藤彰子《たそがれの街》1982年 新潟市美術館蔵

街シリーズの最初の頃で、夕焼け空っていうのは、こう刻々と変わっていく時間帯っていうのは私大好きなんです。そのところに何か突き抜けていくものと、中に入っていくものの、両

ていうか…みんなでわいわいするやつ。…遠藤君がね、その隅の方にいるんですよ。普通科から参加してる人は少なかったからかもしれませんけど。こちらは芸術科だからみんなわいわい騒いでたら、静かで、素敵な男の子がいるからね。「遠藤君、おいでよ」って言ったの、そしたら彼は照れてね、こつち来るんだけど、わいわいしてるうちにまた向こう行っちゃうわけ。また「遠藤君、おいでよ」って。そしてなんとなく仲間になって。それから少しずつお話をね、するようになって。そんな感じで22歳で結婚したの。わかんないですよ。新潟のスケッチ旅行がなければ、結婚してなかったと思う。

——「遠藤“彰子は生まれてなかったわけですね。」

違うかたちになってたかもしれない。不思議ですね。だから新潟っていうとね、私的には、ああ、あそこ行っただっていつも思い出すの。

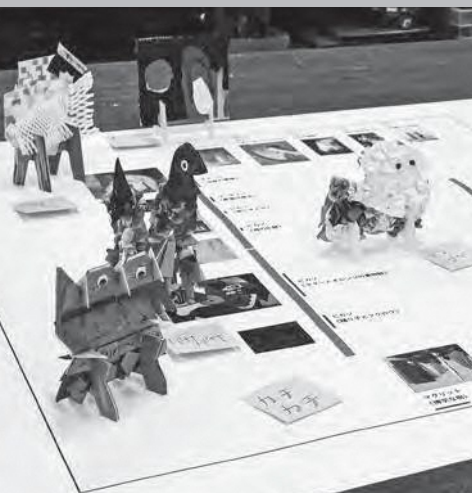
2024年3月17日(日)

ワークショップ 「オノマトペからマスコットを つくろう」を開催しました。

新潟で活動する美術家・ワタナベメイさんを講師にお迎えし、当館で約4年ぶりとなるワークショップを実施しました。「コレクション展4」の名品特集を鑑賞しながらそれぞれの作品の表面の様子や質感を「オノマトペ」に変換し、その「オノマトペ」をてがかりに厚紙を用いてマスコットを制作しました。

完成したマスコットのオノマトペは「カチカチ」「ゴワゴワ」などなど…。質感や、色の重ね方、作品の形などに注目したものが出来ました。展示室マップに集結させると、各々の個性が際立って見えてきます。マスコットづくりを通じて、より作品に親しみをもてたように思います。講師を務めて下さったメイさん、ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。

(学芸員 岡村 秀美)



改修と増築を繰り返す美術館

前山裕司 新潟市美術館特任館長

新潟市美術館はまもなく大規模改修のために、一年近く長期の休館に入ります。美術館の命綱ともいえる空調機器や外壁など作品や来館者を守る重要な工事です。ところで改築、増築を繰り返した美術館といえ、すぐ思いつくのはニューヨーク近代美術館です。ここでMOMAという略称で世界的に知られるこの美術館のことを書いてみたいと思います。



彫刻庭園の向こうに谷口吉生設計の新館が見えます。

MOMAはフランスやアメリカの近代・現代美術のコレクターのアビー・アビゲイル・ロックフェラーと、同じくコレクターの2人の友人、3人の女性が構想して始まり、開館したのは1929年、日本でいえば昭和4年の11月7日です。この年は世界史の教科書にてくる世界恐慌の年で、ウォール・ストリートで株価が大暴落した10月29日は「ブラック・チューズデイ」といわれます。つまり、MOMAはその9日後という最悪の時期にオープンしたといえるでしょう。

まず、現在の住所と違う5番街と57丁目の角ヘクシャービル12階を借りて(!)美術館が始まります。開館記念展は「セザンヌ、ゴーギャン、スーラ、ヴァン・ゴッホ」。4人の巨匠の名前を見るとMOMAにしては穏当な印象ですが、当時これらの作品をニューヨークで見るとは難しく、ヨーロッパからも多く借用した野心的な展覧会といえますが、

この時期のMOMAで興味深いのは、スナミ・ソウイチ(角南壮)という日系移民がカメラマンとして加わり、40年近くこの美術館で仕事をしていることです。さらに脇道に逸れると、それ以前シアトルにいた角南は、フォッコ・タタマというオランダ人画家の画塾で学んでいます。栃木県出身の清水登之や埼玉県生まれの田中保も数年後にここで学んでいました。

30年代は何か所も移転しながら活動を続け、1936年には「キュビズムと抽象芸術」という歴史的な展覧会を開催しています。いまだに販売されているこの図録を見ただけを思い出します。

あと5年で開館から100年ですが、収蔵品は60から、現在の約20万点というのは想像を絶します。MOMAの話を書いたのは、美術館というものの本来の性格として、増えていく収蔵作品や資料、新しい表現などに対応するために、施設や機材をバージョン・アップしていく必要があるということの顕著な例として示したかったためです。全国の地方自治体の施設改修担当の方には、壊れた箇所を治すだけでなく、ぜひプラスチックアルファを認めていただけますように。

て驚くのは、クレイ(40年没)もドローナー(41年没)もまだ存命中で、エルンストもモンドリアンもグロピウスもまだアメリカに亡命・移住していません。

1939年5月10日、MOMAは現在の場所西53丁目11番にオープンしました。この年の12月には「パウハウス1919-1928」という、わずか5年前にナチスによって閉鎖を余儀なくされたパウハウスを評価・検証する大規模な展覧会を行なっています。モダンデザインを活動の主軸とする方針は現在まで受け継がれています。

60年代には、MOMAの最初の建築部門のキュレーターだった建築家フィリップ・ジョンソンが改修を行います。このときアビー・アルドリッチ・ロックフェラー彫刻庭園が造られました。もちろん、MOMAの創始者の1人の名前を冠したものです。

1983年シーザー・ペリの改修を経て、1996年売りに出た隣のホテルを購入したMOMAは、1997年日本人建築家の谷口吉生を指名して増改築を行い、2004年にオープンしました。当時、谷口吉生が手がけた丸亀市猪熊弦一郎現代美術館や豊田市美術館に、MOMAの人たちが視察に来ているというウワサが聞こえてき